

研究ノート

発音チェックにおけるフィードバック
の工夫

—オンラインでのラポール形成を目指して—

戸田 貴子・大戸 雄太郎・竹内 雪乃

要 旨

本稿では、発音クラス「なめらか！発音 3・4」の課題の一つである「発音チェック」について、実習生のフィードバックを分析し、学習者とのラポール形成を目指して実習生がどのような工夫を行ったのかを明らかにする。

実習生のフィードバックのデータは、ラポール形成の観点から、情意フィルターを下げる、自己開示をする、学習者に関心を示す、共感する、協働するの5つのカテゴリーに分類できることが分かった。一部のカテゴリーはフィードバックのガイドラインにも言及が見られたが、その他のカテゴリーは担当教員、TA、実習生の意見交換によってガイドライン以上の工夫が生じたことが明らかになった。

分析の結果から、実習生が積極的に工夫を行うことで、オンライン上でもラポール形成を行った上で、学習者の学びを支援することができる可能性が示唆された。

キーワード

発音チェック 音声教育 ICT ラポール形成 フィードバック

1. はじめに

1.1 研究の背景

言語教育研究において、フィードバックに関する研究には以前から数多くの成果が挙げられている (Lyster & Ranta 1997、Gass 1997、川口・横溝 2005)。しかしながら、その研究動向は大きく変化してきている。例えば、Krashen (1982) は学習者心理における誤用訂正のマイナスの側面を強調したが、現在、フィードバックの効果に関しては、学習者にポジティブな影響を与えると主張する研究が多くみられる。Hattie & Timperley (2007:104) は、「フィードバックの力」について、‘when feedback is combined with effective instruction in classrooms, it can be very powerful in enhancing learning.’ と述べている。筆者らは、フィードバックのポジティブな影響に着目し、筆者らが運営する、対面授業とオンライン授業のブレンディッド・ラーニングを導入した発音クラス「なめら

か！発音 3・4」においても発音のフィードバックを取り入れている。しかし、フィードバックに関する多くの先行研究は、対面授業を前提としたものであり、「なめらか！発音 3・4」のようなオンラインによる日本語音声教育を目的としたフィードバックの研究は管見の及ぶ限り皆無である。

オンライン学習では、学習意欲の維持・向上、学習の継続が課題であるが、単なる発音上の誤用訂正のみのやり取りでは、これらの課題を解決するのは難しいと考える。「なめらか！発音 3・4」のコースにおいては、オンライン上で発音フィードバックが頻繁に行われるが、上記の理由から、発音上の誤用訂正だけを目的とはしていない。教育効果を高め、コースの到達目標を達成する為には、フィードバックに工夫を施すことが不可欠であり、工夫によって、オンライン学習の課題にもプラスに働くのではないかと考える。

そして、表情などが直接伝わりにくいオンライン上では、フィードバックを介したラポール形成がより重要となる。「なめらか！発音 3・4」では、フィードバックを行う実習生に、ラポール形成を目指した工夫を行うよう働きかけてきた。学習支援とラポール形成の関連性については、本号所収の戸田（2019）を参照されたい。

本稿は、オンライン上の日本語音声教育を目的としたフィードバックについて考察するものである。特に、学習意欲の維持・向上、学習の継続を支える重要な要素である、フィードバックをとおした学習者とのラポール形成に着目する。

1.2 研究目的

本稿では、情報通信技術（ICT）を活用した日本語教育のあり方を考察し、新たな音声教育実践の方法を提案する為に、「なめらか！発音 3・4」で行われた実習生の発音フィードバックを分析する。具体的には、実習生の発音フィードバックが行われる「発音チェック」において、学習者とのラポール形成を目指して、実習生がどのような工夫を行ったのかを明らかにする。

「発音チェック」とは、オンライン上で文字や音声を用いて行われる、学習者と実習生のやり取りのことを指す。学習者は、課題の文を読み上げて録音し、早稲田大学の Learning Management System（LMS）である CourseN@vi に提出する。実習生はそれを確認し、学習者に発音フィードバックを行う。「発音チェック」は、本来一時的な性質の強い「発音」を録音し、さらにフィードバックを文字・音声のメッセージで送信することで、やり取りを学習者・実習生がともに複数回参照可能な記録とし、教育効果を高めている。

他方で、オンラインでは、学習者に実習生の表情や声の調子が正確に伝わりづらいという課題がある。筆者らは、学習者が、顔の见えない相手に自らの発音を評価されることに対して少なからず抵抗を感じるのではないだろうかと考えた。そうした理由から、計 15 回程度のフィードバックをとおして、学習者とラポールを形成できるよう工夫を行った。

2. 調査方法

2.1 調査フィールド

本研究は、早稲田大学日本語教育研究センター設置の留学生対象科目である「なめらか！

発音 3-4」¹と、日本語教育研究科設置の大学院生対象科目である「日本語教育実践研究(10)」(以下、実践授業)で行われた。対象としたデータは、筆者らが携わった 2018 年春学期の履修者である「なめらか！発音 3-4」の学習者 35 名と、実習生（大学院生）5 名のデータである。

1.2 に示した通り、「なめらか！発音 3-4」の学習者は、本学の LMS である CourseN@vi 上に、各週の課題として自ら録音した音声を出した。それに対し、実習生が 1 週間以内にその音声を聴き、フィードバックを行った（発音チェック）。フィードバックを踏まえたうえで、自身の発音を修正し、再度録音して提出（再提出）するよう推奨した。以上の学習者と実習生の文字、あるいは音声でのやり取りを、フィードバックのデータとして調査に使用した。

2.2 フィードバックの方針

2.2.1 ガイドライン

「なめらか！発音 3-4」の発音チェックを担当する実習生には、2012 年度のコース開設以来、蓄積してきた経験に基づくガイドラインが提供されており、フィードバックの際に活用するよう推奨されてきた。ガイドラインの一部を図 1、図 2、図 3 に示す。

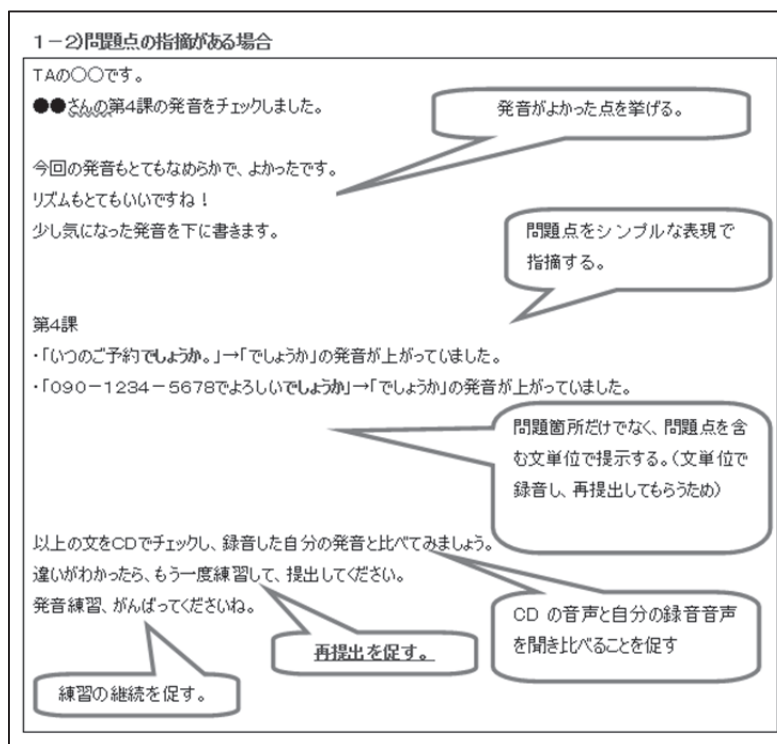


図 1 ガイドライン：発音チェックの文章例

発音チェック:対話例		
例	学習者	TA
①	苦手な発音がうまく言えるように頑張ります！	わからない点、難しい点がありましたら、コメント欄になんでも書いてくださいね。
②	Casualの日本語は上手になりたいです。	Casualな日本語が話せるとより親しくなれますね ^^練習がんばりましょう！

オンラインで行う発音指導は学習者の顔が見えませんが、メンターにとっては不安に感じられることも多いかと思いますが、上記のように対話を行い、学習者とのラポール形成を心掛けることが大切です。これまでの実践の成果から次のことがわかっています。

図2 ガイドライン：発音チェックの対話例

<ul style="list-style-type: none"> ● ラポール形成を通して、学習者はメンターの丁寧なフィードバックに感謝している。 <p>以下、なめらか！発音3-4を受講した学生のインタビューの一部をご参考までに引用します。</p> <p>Q：TAのフィードバックはどうだったか？</p> <p>A：全体としてとても良かった。早稲田で他にも発音の授業を取っていて、先生からフィードバックをされることもあるが、それよりもTAのフィードバックは細かく真面目で真剣だと感じて良かった。TAからはいつもフィードバックの前に「最近では寒くなつて」などの挨拶をしてくれ、距離が近く親しみを感じており、お姉さんのような存在だった。これは「なめらか！発音」の良い点だと思う。</p> <p>⇒オンラインで行う教育も、やはり人と人の関係が一番大事ですね。</p>

図3 ガイドライン：学習者インタビューの紹介

フィードバックによる発音指導の経験のない大半の実習生にとって、いつ、何を、どの程度、どのように指摘するかを決めることは困難が伴うものである。ガイドラインでは、図1のように、どのような発音に対し、どのようなフィードバックを行えば良いかを質・量ともに具体的に示してあり、経験のない実習生にとっても分かりやすいものであり、学期の初めには一つの指標として機能している。また、図2、3のように、具体例やインタビューデータを示しつつ、単に発音の指摘のみを行うだけでなく、天候に言及したり、体調を気遣ったりすることを奨励している。

しかし、学期の初めにはガイドライン通りに指摘を行っていた実習生であっても、学期が進むにつれ学習者の個性を把握するとともに、実習生自身の考えもフィードバックに反映されるようになる。また、ガイドライン通りの指摘のみでは、実習生の発音に変化が起きないことも多く、実習生はガイドライン以上の工夫を求められることも多い。担当教員は、実践授業で「あくまでガイドラインであり、マニュアルではないので、フィードバックに慣れてきたら積極的に自らの工夫を加えていくよう」に指導している。

2.2.2 実践授業での意見交換

さらに、LMSの「共有設定」により、自分以外の実習生によるフィードバックや学習者

とのやり取りにアクセスすることが可能であった。週に一度の実践授業の時間には、実際のフィードバックのやり取りを CourseN@vi で参照しながら、担当教員、TA、実習生らによる意見交換が行われた。毎週の活発な意見交換が、フィードバックに与えた影響は大きかった。例えば、自己開示に関しては、自分自身のことについて言及することに抵抗を感じていた実習生もいたが、他の実習生と工夫について話し合ったり、コメントを見せ合ったりすることによって、徐々に抵抗感が解消されていった。

これらのフィードバックの方針は、実際のフィードバックにどのように影響し、実習生によってどのような工夫がなされたのか分析していく。

3. 調査結果


まず、2.1 に述べたフィードバックのデータのうち、ラポール形成を目指したフィードバックに該当する部分を抽出した。次に、抽出されたデータを、以下の 5 つのカテゴリーに分類した。1. 情意フィルターを下げる、2. 自己開示をする、3. 学習者に関心を示す、4. 共感する、5. 協働するの 5 つである。分類方法は、クラッシュン & テレル (1986)、川口 (2011)、縫部 (2001) を参照した。カテゴリーごとに分類されたデータについて詳述する。

3.1 情意フィルターを下げる

ラポールを形成する為には、まず、実習生と学習者の間の緊張感を和らげる必要があると考えた。フィードバックのコメントを始めるにあたっては、いきなり本題の学習内容に入るのではなく、挨拶として天候の話題から始めることが多かった。

- ・梅雨に入りましたね。暑くなったり涼しくなったり気温の変化が激しいので、体調に気をつけてくださいね。
- ・暑い日が続いていますね。レポートや試験が多い時期ですが、体に気をつけてがんばりましょう！
- ・〇〇さん こんにちは。今日はいい天気ですね！

また、学習者の学習上の不安を取り除くコメントを行った。そうしたコメントを実際の会話を模して話しかけるように行う為に、「ね」「よ」「！」といった終助詞・感嘆符を用いた。さらに、実習生の感情を示す為、絵文字を使用した。

- ・もちろん、他の人も発音の問題、ありますよ！ でも、みんな苦手なところが違います。(自分以外の学習者も発音の問題があるか、という学習者からのコメントに対して、下線は筆者)
- ・テスト、お疲れ様です。みんな大変そうですね・・・ 1 回提出が遅れたくらいでは、特に問題にならないので、安心してください^^ 無理はしないでくださいね。(提出が遅れた学習者に対して)

- ・今回が教室に来る最後の授業ですね。何かわからないこと、不安なことがあったら聞いてくださいね！
- ・ちなみに、フィードバックは何語でもいいですか。このように日本語でフィードバックをしてもいいし、〇〇語もできますよ。何か質問があれば、日本語でも〇〇語でも遠慮なく聞いてくださいね！（実習生と母語が同じ学習者に対して）

さらに、学習者の努力や発音の上達を褒め、励ました。学習者の学習に対する不安を和らげ、自信をもって学習に臨んで欲しいと考えた為である。

- ・アクセントの発音がよくなっています。特に 12 課がよかったです。〇〇さんがアクセント核に気をつけて発音しているのがわかりました。
- ・発音の練習、お疲れ様でした！毎週しっかり提出して、本当に素晴らしいです！
- ・二回も再提出していて本当に素晴らしいです！「イチロー選手」のアクセントは正しくなっていましたね！完璧です！この調子で頑張りましょう！

3.2 自己開示をする

実習生は、学習者とのやり取りの中で、自分自身のことを伝えた。自らの情報を学習者に伝えることで、学習者の心が開かれ、信頼関係を深めることができると考えた為である。学期開始当初は、実習生が自己開示をするコメントは少なかったが、学習者とのやり取りを重ねる中で、徐々に増えていった。また、実践授業で他の実習生らと、学習者とのやり取りについて話し合うことも、実習生の自己開示を促進させる要因となった。

- ・毎日暑いですね！レポートやテストで忙しい時期だと思います。夏休みを目指してがんばりましょう！〇〇さんは、夏休みにどこかに行きますか？ 私は、私の出身地の△△に帰ろうと思っています。
- ・ゴールデンウィークはどうでしたか？ わたしは宿題がたくさんあったので、家でたくさん宿題をしました！
- ・まだ夏が始まったばかりなのに、もう暑いですね。暑すぎて、外に出たくなくなります…〇〇さんは秋葉原と聞いて何を思い浮かべますか？私は、テキストと同じで、メイドカフェです。一度、友達と行ったことがあります。かわいいけど、値段がとても高くてびっくりしました！！
- ・ゴールデンウィークいろいろなところに行ってよかったですね！私は箱根にいったことないです…機会があれば行きたいです。ゴールデンウィーク私は四国の香川と高知に行きました。瀬戸内海はとてもきれいでした！

3.3 学習者に関心を示す

実習生は、ガイドライン（図 3）で示された学習者のインタビューから、実習生と学習者の関係は、教師と学習者といった関係というよりも、より距離が近く親しみやすい関係でありたいと考えていた。しかし、オンラインのフィードバックでは、声のトーンや表情

で学習者に実習生の意図を伝えることが難しい。実習生は、実習生と学習者の関係が、単に発音を評価する側とされる側といった関係であると学習者に捉えられてしまう可能性があると考えた。そこで、学習者の母語、出身地、趣味、日本での生活、日本語の学習法に関心を示し、学習者のことを理解したいという気持ちを伝えた。そうすることで、実習生の関心は、学習者の学習のみではなく、学習者自身にも向けられていることを示した。

- ・ゴールデンウィーク楽しく過ごしましたか？どこかに遊びに行きましたか。
- ・〇〇さんは日本語のドラマやアニメなどを見ますか。好きなアニメやドラマはありますか。
- ・〇〇さんこんにちは！日本語能力試験、お疲れさまでした！試験はどうでしたか？
- ・雨の日が続いていますね。今年の梅雨は雨の日がすくない気がします。〇〇さんの住んでいる地方は梅雨がありますか？
- ・今回の片仮名ことばの練習はどうでしたか？〇〇さんは英語の母語話者ですが、片仮名ことばは難しいですか？それとも簡単ですか？
- ・アクセントは以前と比べすごくよくなりましたね！どうやって練習したのですか？もしよかったら、〇〇さんの練習方法を教えてください！
- ・第7課と第8課の発音をチェックしました。イントネーションはとても自然でした！〇〇さんはよく日本人の友達と話したりしますか。

実習生が自己開示し、学習者に関心を示すうちに、学習者からも同様の反応が返ってくるようになった。そうしたやり取りの中でラポールが形成されていったように思われる。

3.4 共感する

課題の提出が遅れた学習者には、課題が提出できなかったことへの理解を示し、共感するコメントを行った。提出が遅れたり提出がなかったりした学習者は、後にその理由と謝罪の気持ちを伝えることが多かった。実習生は、実践授業においては教師に近い立場にあったが、大学院においては学習者と同じ学生の立場であった。その為、課題の締め切りに追われる学習者に共感することができた。また、そうしたコメントの後は、学習の様子や体調に気遣いながら、次回の提出に向けて励ますことが多かった。

- ・発表とかレポートとか、締め切りがたくさんあって大変ですよ...（わたしもです...）。シャドーイングのクラスもあと1か月です。引き続き、一緒に頑張りましょうね！
- ・今、テストやレポートでとても忙しいですよ。お疲れ様です。〇〇さんは今までしっかりと課題や提出に取り組んでいたの、少し遅れても大丈夫ですよ。ただ、再提出の締め切りは7月31日火曜日です。8月1日からは提出できなくなるので気を付けてくださいね！
- ・先週は忙しかったんですね。フィードバックのところで〇〇さんのコメントを見ました。中間テストやレポートの時期でしたね...。JPCもあって、大変だったと思います。〇〇さんは、再提出も積極的にしてくれていますね！すばらしいと思います。

梅雨に入って、暑くなって涼しくなったりするので体調に気を付けてくださいね。

- ・11課と12課の発音練習の提出を忘れてしまったというコメントをくれて、ありがとうございました。少し心配していたので、安心しました！^^ 私は、今、宿題が沢山あって忙しいです。だから、〇〇さんも忙しいというのわかります！再提出は、ゆっくりゆっくりでOKです！忙しいけど、風邪をひかないように、気を付けて下さいね！一緒に頑張りましょう！！

3.5 協働する

実習生は、学習者に、一人で学習に取り組むのではなく、実習生と共に取り組むように伝えた。また、LMSを活用して、学習者と共に発音の上達を振り返った。上達した点の中でも、学習者が特に気にしている発音を取り上げるよう心掛けた。加えて、学習者に役立つと思われる学習リソースを伝えた。

- ・〇〇さんがなめらかな発音になるように、サポートするので、わからないこと、困ったことがあったら、いつでも質問してください！一緒にがんばりましょう！
- ・最近〇〇さんの発音は完璧になって、間違っていたところを探すのも難しくなりましたよ。これからも一緒に頑張りましょう！
- ・最初の方と比べてみると、〇〇さんの発音が上達しているのわかります。時間があったら、以前の録音と比べてみてくださいね。
- ・「つ」が気になるということでしたね。今回は確かに「つ」のつく言葉がたくさんありましたね。わたしは、〇〇さんの「つ」の発音は、よくなっていると思いました。特に、8行目の「暑い日のかき氷は…」の「あつい」はとても自然に聞こえました。
- ・とてもなめらかで、ほとんど直すところがありませんでした！！すごい！！今までずっと苦手だった小さい「つ」も、最近はなめらかに発音できているし、練習の成果が出ていますね！
- ・ちなみに、もしアクセントが分からないときは、次の OJAD (Online Japanese Accent Dictionary) がおすすめです！文章や単語を入力して、アクセントが分かりますよ！発音の練習、がんばってくださいね！

4. 考察

本調査では、実習生のフィードバックのデータのうち、ラポール形成を目指したフィードバックに該当する部分を分析した。実習生は、1. 情意フィルターを下げる、2. 自己開示をする、3. 学習者に関心を示す、4. 共感する、5. 協働するの5つのカテゴリーに分類されるフィードバックを行っていたことが分かった。

5つのカテゴリーのうち、1. 情意フィルターを下げる、と5. 協働するに分類されたフィードバックのコメントは、学期の初めに提供されたガイドラインでも推奨されていた。具体的には、2.2.1の図2と図3を参照されたい。図2では、学習者からの質問や疑問を受け入れ、実習生と学習者が一緒に取り組むように伝えることを奨励しており、これは5.

協働するに分類可能である。また、図3では、天候に言及するなどの挨拶を通じて、学生が実習生に親しみを覚える様子を紹介しており、これは1. 情意フィルターを下げる、に分類可能である。

しかし、2. 自己開示をする、3. 学習者に関心を示す、4. 共感するはガイドラインで取り立てて言及されてはおらず、実習生がその時の状況に応じて、自ら工夫したものである。実習生が行うフィードバックのコメントは、ガイドラインが奨励する通り学期開始当初からラポール形成を目指すものであった。加えて実習生が、実践授業において担当教員、TA、他の実習生と意見交換を行ったり、LMSを活用して他の実習生と学習者とのやり取りを参照したりするうちに、ガイドライン以上の工夫を行うようになったと考えられる。

学期開始時、実習生の中には、オンライン上のやり取りだけで学習者とラポールが形成できるかを疑問に思う者もいた。しかし、学期終了時には、実習生全員が確かな手ごたえを感じていた。学習者に実習生の表情や声の調子を正確に伝えることが難しいオンライン上であっても、実習生の積極的な工夫によって、ラポールが形成できることが示唆された。

5. まとめと今後の課題

本研究では、実習生は学習者とのラポール形成を目指して、5つのカテゴリーに分類される工夫を行っていたことが明らかになった。担当教員が提供するガイドラインにも言及されていた、「情意フィルターを下げる」「協働する」のカテゴリーに分類される工夫だけでなく、「自己開示をする」「学習者に関心を示す」「共感する」のカテゴリーに分類される工夫が新たに見られた。これらの新たな工夫は、LMSの「共有設定」により、他の実習生と学習者のやり取りにアクセスできる仕組みに加え、実践授業における担当教員、TA、実習生同士の意見交換によって生まれたものであった。これら5つのフィードバックは、ラポールの形成を目指すフィードバックの指標になり得ると考える。本研究の成果は日本語音声教育だけでなく、これまで検討されることの少なかったオンライン教育・研究全般に有意義な示唆を与えるものである。

また、本稿は実習生の工夫によるラポール形成に着目したが、これらの働きかけによって、学習者の発音学習が意欲的になされていたことも分かっている。学期中や後に行う学習者対象のインタビューからは、学習者が実習生のフィードバックにプラスの影響を受け発音学習を続けていた様子や、実習生に感謝する様子が見られた。また、通常オンライン授業では学習者の修了率の低さが課題になることが多いが、本稿の分析対象とした2018年春学期は、修了率100%を達成し、発音学習が継続的に行われたことが分かった。詳しくは、本号所収の戸田（2019）を参照されたい。

本稿では実習生による働きかけに焦点を絞ったが、「なめらか！発音 3・4」の学習者のインタビューを詳細に分析し、学習者がフィードバックから得た学びについて明らかにしていくことが今後の課題である。

注

- 1 「なめらか！発音 3・4」の詳細については、本号所収の戸田（2019）を参照されたい。

謝辞

本研究は「グローバル MOOCs における日本語発音オンライン講座の運用に関する実証的研究」JSPS 科研費 J17H02355 基盤研究 (B) (代表者：戸田貴子) の助成を受けている。

参考文献

- 川口義一・横溝紳一郎 (2005) 『成長する教師のための日本語教育ガイドブック (下)』ひつじ書房
 川口義一 (2011) 「初級日本語教室における日本語能力—その認知的側面・情意的側面・社会的側面—」
 『早稲田日本語教育学』9号、pp.33-40
 クラッシュェン, S. D. & テレル, T. D. (Krashen, S. D. & Terrell, T. D.) (1986) 『ナチュラル・アプ
 ローチのすすめ』(藤森和子訳) 大修館書店 (原著は 1983)
 戸田貴子 (2019) 「ブレンディッド・ラーニング—新たなモデルの構築と音声教育実践—」『早稲田日
 本語教育学』26号
 戸田貴子・大久保雅子・神山由紀子・小西玲子・福井貴代美 (2012) 『シャドーイングで日本語発音
 レッスン』スリーエーネットワーク
 縫部義憲 (2001) 『日本語教師のための外国語教育学—ホリスティック・アプローチとカリキュラム・
 デザイン—』風間書房
 edX (WasedaX) 'Japanese Pronunciation for Communication' (<https://www.edx.org/course/japanese-pronunciation-for-communication-2>) (2019年5月23日)
 Gass, S. M. (1997) *Input, Interaction, and the Second Language Learner*, Mahwah, NJ: Lawrence
 Erlbaum Associates
 Hattie J. & Timperley, H. (2007) The power of feedback, *Review of Educational Research* 77(1),
 pp.81-112
 Krashen, S. (1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*, Oxford: Pergamon
 Lyster, R. & Ranta, L. (1997) Corrective feedback and learner uptake: Negotiation of form in
 communicative classroom, *Studies in Second Language Acquisition* 19, pp.37-66
 OJAD 'Online Japanese Accent Dictionary' (<http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/>) (2019年5月
 23日)

(とだ たかこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科)

(おおど ゆうたろう 早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士後期課程)

(たけうち ゆきの 早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程)